

新たなオーラル英語授業における教育的効果

—仕事に打ち込む人物ビデオを題材に—

金 岡 正 夫

(鹿児島大学教育センター)

The Educational Effects of a New Oral English Class: Using Videos to Illustrate Personal Commitment to One's Career

Masao Kanaoka

(Education Center, Kagoshima University)

Summary

This study aimed to explore whether using videos that focus on professionalism and personal commitment to one's career can change attitudes toward learning and energize language learning for Japanese EFL learners. The videos used in the study were recorded from TV programs aired in Japan (and spoken in Japanese, not English). This study specifically investigates whether such materials enable Japanese college students to better describe in English their short- and long-term life goals. The study also looks into the effectiveness of using such videos for the motivation of language learning. The study involved twenty-eight freshmen in the humanities, covered a one-semester period (October 2005 to February 2006) at a national university, with thirteen weekly 90-minute class periods. Various output-focused activities (i.e., pair work, group work and presentations to the whole class) and peer evaluations were implemented in class so the students could become more accustomed to expressing critical opinions in real-life contexts. Take-home assignments that encouraged each student to engage in self-reflection on the content of the videos and then write his/her own thoughts and ideas in English were given to promote self-confidence and ready access to useful internalized language in preparation for speaking activities in the following class.

キーワード：英語学習、動機づけ、自己省察、現実社会、ビデオ

Keywords: language learning, motivation, self-reflection, real-life contexts, videos

はじめに

昨今の大学英語授業用市販テキスト、とりわけ一般教養（共通教育）レベルの構成は「幅広く知識を吸収する」ものとなっている。加えて「楽しく学べる」題材、言い換えると一過性の思考活動で終わりがねない内容が目立つ。反面、生きるとは／個人的価値観とは／自己信念とは／仕事（就職）を通しての社会的貢献とは／などの人生哲学や自己問答を促すテキストは散見したところあまり見当たらない。市民性と公共性の涵養を謳い、自己と現実社会との接点模索を継続的、系統的に促す題材・タスクを取り入れた本質論的な英語テキストは、いまだ市民権（つまりマーケットビリティ）を得ていない。このような深く重いテーマは、今の大学生から忌避されるという本音が、現場教員および出版社側にあると推測される。

国内外の著名・有名人を題材としたテキストが最近一部の出版社から上梓されている。その構成を見ると、ユニットごとに人物が入れ替わり、その内容は通り一遍的な描写（結果論オンリーの論理展開かつ表層的な情報提供）に終始している。つまり「金太郎飴」構成となっている。ある出版社は「特定の限られた人物より、幅広く国内外の人物

を紹介する構成でないと（売れないため？）困る」と言う。学習者に真摯に考えてもらえるよう、深く掘り下げた内容構成は、売れるか否かのリスクが大きいという出版社側の本音が見え隠れする。

そのような散逸的な内容構成では、「掘り下げた共通テーマ」(ex. ある人物たちの生き様、こだわり、信条、信念、市民性、公德心など)を、個々学習者が系統的、発展的に自己対話を続けながら考究することは不可能に等しい。学習目的や到達度という点では、ユニット（人物）ごとに関連する語彙、語法、文法、構文、およびその人物に関するうわべの知識の習得（結局詰め込み？）に終わるのではなかろうか。これでは従来の知識伝授型、機械的暗記作業中心の英語学習スタイルと何ら変わらない。あんなヒト、こんなヒトが世の中にいるよという内容構成では、実社会に向けて個々学習者の価値観や信念育成を促す教材にはなり得ない。畢竟、本質的な自己発信能力が育つとは考えにくい。筆者が一番危惧するのは、このような「自己とのせめぎ合い」の機会を持たない教材および学習活動は、これまでの受験勉強同様、最終的に「英語を学ぶ」ことだけに終始する点にある。真面目で洞察心があり、それゆえシニカルに捉える学習者たちは、そのような教材に対して冷ややかに見透かしているかもしれない。「だからどうなの？それらの内容を覚えてどうなるの？」「試験が終われば忘れるだけでしょ。」それがホンネではなかろうか。

これからの大学英語教育において、学習者と現実社会との接点模索を促す授業づくりが重要となる。先の予測がつかない、不安定な社会情勢下での人生目標と具体的進路の設定、そのための自分探しが続く。かつてのタテ社会、終身雇用制度、日本型経営などが成り立っていた時代には、ある程度ルールが敷かれていた。マニュアル通りに進むと、就職よろしく自分の進路や方向性が、好むと好まざるとにかかわらずお膳立てされていた。その“ready-made”を通して、一種の元服の儀（イニシエーション）がなされていた。

今の時代は違う。「自分はこうだ、こうでありたい、だからこうしていく」と言い切れる自己開示／告白能力なくして、イニシエーションは成り立たないのではないだろうか。ならば、いつ、どこでイニシエーションの場を設けるのか？ そのお膳立てとなるのは、リベラル・アーツに他ならない。それは決して特定の科目や分野で縛られるべきではない。絹川（1995）が指摘する通り、全人教育は知識の伝達だけでは成り立たない。大学一般教育における英語授業がリベラル・アーツである以上、「常にそれは問いなのである。常に問いであることは、そのことがあいまいであるということではなく、無限の深さと広さを意味することである」（p. 104）。つまり一般教育の問題は、「単なる教育技術上の問題ではなく、思想の問題である」（同、p. 141）。佐伯（2003）もそれに近い形でこう述べている。「問う力をつけることが、本当の学力であるというのが私の考えなのだが、従来の教育では答える力のみが学力として取り上げられてきた」（p. 61）。

これまでの大学英語教育然り。その反省と日本人（学習者）ゆえの弱点（？）をふまえ、慶應義塾大学で教鞭を執る鈴木（2003）はこう警鐘を鳴らす。「自分のアイデンティティをどう表現するか、SFC 英語ではこちらの方が重要なテーマである。自分はどの社会で生きていくのか、個人としてどのようなことを大事に伝えていきたいのか、日本人には一番不得手な問題に真っ向から取り組む」（p. 63）べきである、と。「大学である限り表面的な会話ではなく、学生自らの内から生れる考えを述べ論じる。英語を通して知を探る活動を許す空間としての英語の授業が必要である」（同、p. 174。下線部は筆者）。ここで言う「知を探る活動」とは、単なる知識の獲得（fact-based）ではなく、「自己および社会全体をも問い直す、疑う力の育成活動」と考えたい。なぜなら鈴木が言うように、言語の貴賤が内容を決めるのではなく、「話者の考え方の質で決まる」（同、p. 174）ことが、これからの日本の大学英語教育に求められるベクトルに他ならないからである。「日本の大学が生き残れるとしたら道は限られている。ひとつはアジア独自の視点で学問を見直すことである。（中略）アジアの視点で問題発見・解決型の授業を行えばよい」（同、p. 152）。SFCの独自カリキュラムゆえのアジア重視ではある。が、通底しているのは、グローバル下での日本の大学、そこでの全人教育に向けた英語授業のクリティカル・ミッションについてである。実社会人に向けての本質的な自己問答、自己の寄る辺となる真実への考究を厭わない自己対話の徹底重視。そのためには「本物の、個人的な話を、教科書のような教室活動に限られた教材を離れてできるようにならなければならない、ということである」（吉田、1997、p. 223）。その点について Chomsky（2006）はこう語る。「真の学習は真実の発見を通して起こるのであって、公式的事実の押しつけを通してではないのです。それでは決して自立的批判的思考の発達に至ることはありません」（pp. 42-43）。

これからの大学英語教育を考えた場合、そのベクトルはこれまでの通念に則した語学教育だけでなく、安西（2003）が示唆する「語力教育」に向けられてもおかしくはない。自己客体化、そのために必要な過去・現在・未来と

いう時系列上でのセルフ・ストーリーの展開。その概念と情動を体内に取り込むことにより、はじめて自分を物語る際に必要な「言語使用における判断力」(p. 30) が培われていく。自分に問うただけ自分を知ることができる。奥行きのある自己省察と自己表現につながる。俯瞰的に自分を見つめ直した分だけ自己を客体化できる。そのような視座からの授業デザインが、もっと考案・実践されるべきだと思う。就職等でTOEIC が隆盛だが、限られた範疇での「語学力」は試されても、「語力」や「思想」は試されないのである。

「文系、理系という明治の大学制度発足時の人工的な区分がいまだに化石として残り、その融合が問題にされるような日本の矮小化された現状を問題にしたいのではない。そもそも、人としてこの世に生を受けた以上、単に世界の部分だけを知るのではなく、全体を、そして普遍を志向したいという私たち一人ひとりの切ない思いについて考えたのである」(茂木、2006、pp. 27-28)。まず自分とは何か。自己のあり方について自分はどうか考えているのか。その自分を取り巻く世の中についてはどうか。そういった「思想と思考のせめぎ合いを育てる土壌」を看過した中で、全人教育としての英語授業、リベラル・アーツとしての英語科目は成立しえない。

その belief をもとに、これからの自分の生き方、それに付随した学生生活という、避けて通れぬ人生問答に焦点をあてた内容構成、それに見合ったタスク（課題活動）の導入、その中で「今の自分」、「これからの自分」を物語るに必要な語彙（target language）の模索と獲得、それをベースにした文章作成とプレゼンテーションという、「全人教育」を意図した英語授業づくりに挑んだ。個々学習者が自己を物語るに納得のいく「英語を探し出し」、「(その) 英語でより深く自分を語る」ことの重要性。その理念をもとに、ごく限られた人物たちの仕事への情熱、生き様、社会的貢献を描いたビデオを題材に、学習者の自己対話や省察活動を継続・系統的に促す内容構成を考案し、最後に今後の自分のありかた、それに向けた心構えを発信してもらうオーラル授業を実践した。

1. 実施概要

1. 1. 授業科目と受講者

鹿児島大学共通教育科目群における「英語オーラルコミュニケーション」（1 年次必修、1 単位）において、平成17 年度後期、1 年生28名（法文学部人文学科）を対象に実施した（週1 回90分講義）。定期試験や初回のガイダンスを除くと、実質13回の授業を約4 ヶ月間行った（アンケート調査含む）。

1. 2. 人物ビデオの題材と関連教材

ビデオは筆者が番組録画したものを用いた（日本語放映。授業活動を考慮し、ビデオは25分程度にまとめた）。題材の選定基準として：(1)現役で活躍している日本人。(2)有名・無名は問わない。(3)仕事への生きがい、こだわり、信念があり、自他への問題意識を持ちながら社会貢献に邁進している。(4)ヒトを育てるという点で厳しさと愛情が滲み出ている。以上の4 条件から、プロダクトデザイナーの川崎和男と建築家の安藤忠雄の2 名に絞った。さらに川崎和男の母校小学生6 年生たち、安藤忠雄建築研究所に勤めて間もない弟子の一人、加えて中国の日系企業で研修活動を体験した現役日本人学生たちも今回の題材に加えた（計5 本のビデオを用意）。

関連教材は、(1)各ビデオの梗概を英語で要約した“gist section”と、学習者たちが自己対話（＝心の揺さぶり）を促す上で核となる場面（＝発言、行動、心の葛藤など）を英語でリスト化した“key word section”から構成されるプリント（タスク1：input レベル）、(2)それをもとにビデオ視聴後の率直な気持ちや感想をアドリブ、ゼスチャーを交えながら英語で述べ合うペアワークシート（タスク2：intake/internalization レベル）、(3)仕上げとして、(1)と(2)からの情報やフィードバックをもとに、ビデオの感想ならびに今後の自分のあり方について一定の論理構成でまとめた英文エッセイシート（タスク3：output レベル）を用意した。

1. 3. 90分授業のながれ

2 パターンに分かれた授業を行った。前半の90分（A パターン）は、(1)input、intake/internalization、output の各種プリントと題材ビデオの関連資料を配布。ビデオ視聴前に、input プリントを用いてストーリーの概要（gist セクション）および内容に関する重要語句（key word セクション）の理解を行った。その際、synonym（同意語）・antonym（反意語）欄を設け、key word セクションの英語を別の英語で理解してもらうようにした（語彙力増強）。

各人物の「アイデンティティ (ex. 性格、信念、生き様、生い立ち等)」に関わる語彙は key word セクションに盛り込まれている。それを裏付ける関連資料を配布し、補足説明を加えた (英文資料の場合、すべて英語で解説)。(2)ビデオ視聴中 (約25分間)、受講者たちはそれぞれメモをとり、自分自身にとって印象的なキーワード (日本語/英語不問) を書き足した。(3)ビデオ視聴後、ペアワークによる即興英会話 (ビデオの感想や意見交換) をしてもらった。intake/internalization プリントを用い、スキット形式で会話を仕上げてもらった。会話は立って行い、相手と eye contact をとり、body language などとも交え、今の自分の率直な感想 (ex. ビデオの人物と自分との比較など) を語ってもらうようにした。つまりよりプラクティカルな会話練習を促した (スキットの原稿をなるべく見ないように指示した)。より多くのパートナーとペアワークを行い、他者の様々な考え、発想、情念などに会い、視野を広げてもらうようにした。(4)その後 output プリント (次回授業用の予習課題) の作業説明を行った。Input プリント、intake/internalization プリント、ビデオ視聴中のメモ、ビデオ関連資料、そしてペアワークをもとに今自分が感じていること、考えさせられたこと、クラスメートに伝えたい・聞きたい内容などをプレゼンテーション用のショートエッセイとして、output プリントに英語で書いてもらった。語数と論理構成 (ex. 比較対照、原因-結果、時系列、例示など) は適宜こちらで指示した。(5)最後に「何でも帳」に記入 (本日の授業感想、満足度、次回授業への抱負や要望等について)。

後半の90分 (B パターン) は、(6)前回視聴したビデオに関するレビュークイズ (復習小テスト) から始めた。主に input プリントから出題し、ビデオの内容と重要関連語句の理解定着を目指した。ディクテーション (書き取り)、同意語、反意語などを含め、ほとんど記述式となっている。(7)続いて前回の「何でも帳」からのフィードバック (一部感想、要望、質問等の紹介)。(8)その後グループプレゼンテーションによるピアレビュー (グループメンバー個々による英語プレゼンテーションとその評価) へ移った。机、イスを移動し、基本的に4名1グループ構成。グループリーダー、プレゼンターの順番を決めてもらい、各自 output プリントを準備。グループリーダーが moderator (進行役) を務め、最後にプレゼンテーションを行った。プレゼンターには intake/internalization プリントによるペアワーク同様、アイコンタクトやボディランゲージを活かしながら、よりナチュラルなプレゼンテーションを促した。Moderator およびプレゼンター用のセリフをまとめた英文プリント、そしてプレゼンテーション評価シートを全員に配布。各プレゼンテーション終了後、聴き手3名はその評価シートに得点を記入。併せてショートコメントもつけてもらった (特に言っておきたい点、よかった点や brush up すべき点など)。評価項目はプレゼンテーションスキル (Part 1) と内容 (Part 2) に大別され、前者では eye contact / facial expression / body language / pronunciation / volume / confirmation check (発表内容を理解しているかの問いかけ。"Are you with me?" "Are you following me?" "So far so good?" など) の6項目が評価対象となり、後者では unique and interesting / easy to understand / with clear reason(s) and concrete example(s) / effective logical organization / helpful to expand my knowledge and vision / helpful to improve my English presentation next time の6項目とした。これら12項目に対する評点は 1 (very weak) — 5 (excellent) の5段階とした (各 Part 30点。合計60点満点)。聴き手にはプレゼンテーションを聞きながら評価シートを仕上げていくよう指示した。評価とコメントをつけ終わると、そのシートをプレゼンターに渡し、次のプレゼンターへと移っていく。(9)グループプレゼンテーション終了後、self-reflection and evaluation シートを全員に配布 (次回授業時に、グループメンバーからの評価シート3枚と共に提出)。内容は Part 1 および 2 の得点記入 (評定者3名の個々得点を記入。その後、平均点算出)。得点とコメントをもとに、Part 1 & 2 に対する自己評価を行ってもらい、それを英文レポートの形で提出。(10)最後に「何でも帳」(フォーマットは同じ) を配布。本日の授業と一連のタスクについてコメントしてもらった (次回授業開始時にフィードバック)。

以上、(1)~(10)の学習プロセスを、各ビデオごとに繰り返した。自分の考えを明確に示すことの重要性、それを英語でわかりやすく伝えることの奥深さを念頭に、input ~ output プリンに取り組みでもらった。ビデオで取り上げた人物を通して、実社会および自分自身と向き合うきっかけづくり (input) を行い、それをもとに自分の考えを系統的 & 発展的に自己発信 (input/internalization & output) できるよう配慮した。

1. 4. 授業デザインに関する留意点

(1)ビデオ構成

2回の授業で1ユニット（＝ビデオ1本）終了という形をとった。学習者の自己省察を掘り下げていくため、ビデオ構成に細心の注意を払った（表1参照）。この順序のポイントとして、ビデオ1-4は現在も自己啓発に努め、社会の第1線で活躍し続ける日本人2名と彼らの後進育成との関係がスパイラルに展開する中で、自己との葛藤に喘ぐ後進たちの年齢が学習者たちに近づく点にある。そしてビデオ5において「自分たちと同じ目線」に立つ現役大学生たちの、今の、これからの自分に対する自己批判や葛藤、自己省察する姿をみつめてもらうという帰着性を重視した。

表1 ビデオ題材一覧（使用順）

ビデオ	人 物	フォーカス（自己対話・自己省察材料）	付 記
1	川崎和男	現在の職業との出会い／仕事への情熱と思い／大人として、よき社会人として、仕事を通しての社会的貢献／それを裏づける個人的価値観と信念など	逆境（不慮の交通事故による下半身不随と後遺症）とゼロからの再スタート
source	番組名「デザインで世界を変える：プロダクトデザイナー川崎和男」（45分） 平成14年4月25日放映（NHK 教育／ETV 特集）		
2	川崎の後輩（母校小学校6年生たち）	先輩川崎からの叱責と激励（自己への甘え、視野の狭さ、他人への配慮欠如、物事に取り組む真剣さ、身を挺して体験することの重要性について）	独りよがりの我儘さ（「我儘」の意味のはきちがえ）
source	番組名「わがままは思いやりになる」（45分） 平成14年11月9日放映（NHK 教育／課外授業）		
3	安藤忠雄	現在の職業との出会い／仕事への情熱と思い／大人として、よき社会人として、仕事を通しての社会的貢献／それを裏づける個人的価値観と信念など	逆境（全くの独学による建築修行。見通しのないまま事務所開設。仕事の不安定な生活）をはね返す不屈の精神
source	番組名「情熱大陸（VOL.22）安藤忠雄」（25分） 平成10年9月6日放映（MBS 毎日放送）		
4	安藤の弟子（駆け出しの社会人）	師匠安藤からの叱責と激励（自己への甘え、視野の狭さ、他人への配慮欠如、物事に取り組む真剣さ、身を挺して体験することの重要性について）	順風満帆なこれまでの人生（有名私立高校～東大現役入学～就職）
source	番組名「建築って難しいなあ 三浦朋訓 27歳」（30分） 平成16年1月1日放映（NHK 教育／若者たちの現場2004）*特集版として再放送		
5	日本の現役大学生（就職活動を控えて）	中国の日系企業（製造工場）で働く10代の女子工員（中国人）たちの、明確な人生目標、勤労意欲、両親への感謝、生きる喜びを目の当たりにして大きなショックを受け、自己批判に駆り立てられる	漫然とした大学生活（目的意識と問題意識のなさ、それに伴う自己対話・葛藤の欠如）
source	番組名「クローズアップ現代 アンコール特集 中国の生産現場に学べ」（25分） 平成14年10月22日放映（NHK）*特集版として再放送		

(2)指定テキストと推薦図書

2冊テキストを購入してもらった（「プレゼンテーションの英語表現」デイビッドセイン、マーク・スプーン共著、日経文庫；「〈対話〉のない社会」中島義道著、PHP 新書）。1冊目を参考に、ペアワークやグループプレゼンテーションで使える表現を選定した。一方、現在の日本社会や国民性の問題点について、「真のコミュニケーションとはなにか」を問い質すことによって批判的に見つめなおしてもらいたいという願いをこめて、後者のテキストを読んでもらい感想レポートを書いてもらった。推薦図書3冊も紹介した（「人を伸ばす力 内発と自律のすすめ」エドワード・L・デシ、リチャード・フラスト共著、櫻井茂男監訳、新曜社；「現場主義の人材育成法」関満博著、ちくま新書；「働くということ」日本経済新聞社編、日本経済新聞社）。

(3)授業スタイルとビデオ撮影

授業はA、B 2パターン(計180分)で1ユニット/ビデオ終了。そのうち4分の3(135分)は、学習者中心の授業スタイルで進めた。具体的には キーワードリストの音読、ペアワークによる英会話、グループワークによる英語プレゼンテーションとピアレビュー(プレゼン評価とコメント)などである。残り4分の1は、ビデオ視聴と筆者による関連資料の説明(日本語または英語)である。授業中のタスク説明や指示は、可能な限り英語で行った。ビデオ以外は学習者中心&英語主体の学習環境づくりに徹した。ビデオ視聴中(開始、中間、終了時間帯)とタスク風景(ペアワークおよびグループプレゼンテーション)をビデオ撮りした。撮影の意図は、受講者が途中居眠りや内職などせず最後まで見続けているか、そして「自分の英語で自己表現」することに慣れてきているかを確認するためである(5本のビデオ視聴に関して、総じて90%以上の学生たちが毎回真剣に見ていた。居眠り等は数名程度)。

1. 5. リサーチプロジェクト(ポートフォリオ作成)&プレゼンテーション

最後にリサーチプロジェクトによるポートフォリオ作成とそのプレゼンテーションをしてもらった。プロジェクトの目的は、これまでの継続・系統的な自己対話&省察活動をもとに、「今後自分は何を目指すのか、そのために今何を考え、すべきなのか」を自己開示/告白してもらうことにある。そこで以下のプロセスで進めてもらった。(1)自分の将来の方向性を具現化するため、興味・関心のあるテーマ(ex.人物、ニュース、個人的体験、等々)を選び、その選定理由と関連情報収集方法について英語で概略説明を行う(Project-1)。(2)関連情報を資料として添付する(Evidence-1)。(3)(1)と(2)を踏まえ、現在および今後の自分に向けて訴えたいメッセージを英語で記述する(Project-2)。(4)その叱咤激励文を後押ししてくれるような事例、情報を補足資料として添付する(Evidence-2)。

以上をもとに、(5)ビデオ題材の時と同じく、グループプレゼンテーションおよびピアレビュー(同様の評価シートおよびself-reflection and evaluation シートを配布)をしてもらった。(6)各グループで最高評価を受けたプレゼンターは、グループ代表として全受講者たちの前でプレゼンテーションを行った(最終授業)。その際、代表者全員の氏名を記した評価シート(評価項目は同じ)を準備し、全員に配布。今回のオーラルコミュニケーション授業の掉尾を飾るうえで、most valuable presenter(MVP)を選んでもらった。

(1)~(5)までにに関するプリントや資料を、ポートフォリオとして所定のカバーシートにつけて全員に提出してもらった。補足として、Project-1 & 2については所定のタクスシートを配布。Evidence-1 & 2については、原則としてハードコピーの形で提出を求めた(情報資料の内容および使用言語については不問。オンライン、CD ジャケット、写真、雑誌の切り抜き等何でも可。できればA4 コピーの形で提出するよう指示)。

2. 成績評価

シラバスに明記したが、提出物(リサーチプロジェクトのポートフォリオ、output プリント、グループプレゼンテーションにおけるself-reflection プリント等)を30%、ビデオ題材に関するレビュークイズを40%、残り30%を定期試験(計100点満点)とした。レビュークイズについては、5本のビデオ以外に見てもらったビデオ(日本の英語教育の現状と問題点についてのフォーラム)からも出題した。なお、レビュークイズでは、1回目~5回目と回を重ねるにつれ、試験範囲が最初のビデオから次第に拡大するよう設定した。定期試験は基本的にレビュークイズの総括版として焼き直したものである。学生同士によるピアレビューのため、プレゼンテーションスキルの評価については信憑・妥当性に欠ける点があるため、総合評価に盛り込まなかった(最後のグループ代表者たちに若干のプラスアルファを施す程度に留めた)。

3. 事後アンケート調査

今回の英語授業に対する評価や気持ちの変化などについてアンケート調査を実施した。調査項目は、(1)自分自身に対する意識変化、(2)英語学習に対する意識変化、(3)英語学習方略、(4)授業スタイルに関するもので、回答は記述式(一部選択式)となっている。加えて、(5)36の質問項目(英語学習活動や方略、今の、これからの自分のあり方、世の中の流れなど多方面にわたり、6件法による回答)を用意し、気持ちの度合いを測定した。

4. 結果と考察

上記(1)～(5)に関する調査結果を以下表にまとめた。表1は「(1)自分自身に対する意識変化」についての回答および補足コメントを示している。回答者の8割以上が、今回の授業を通して何らかの自己意識変化が生まれたと報告している。

表1 自分自身に対する意識変化（28名回答）

質問	「今回の英語授業を通して、自分自身について（ex. 今後の自分のあり方などについて）何らかの意識変化が生まれましたか」
回答	「はい」＝23名（約82%） 「いいえ」「どちらともいえない」＝5名（約18%）
「はい」と答えた回答者からのコメント（一部紹介）	
* やってみることが大切。積極的になりたい * 1つの物事に対して問題意識や自分の意見をもつようになった * 自分で今まで「こうだ」と思っていたことを他の視点から考えてみる * 相手の意見を聞き理解する。何のために学習するか真剣に考える * 何かを伝えたり話す機会が増え、自分の視野が広まった * 自分の将来について真剣に考える * 目的意識をもって生きていく必要がある * 自分ってやばいんだなあ毎回落ち込み、勉強しないといけないと思った * 何かをやり遂げるためには決して妥協してはいけないと痛感した * 自分の考えを周りの人たちと比較し、意識するようになった * 英語をもっと使っていきたい * しっかりと順序立てて英語で説明する練習をしようと思った	

表2は、回答者からの全コメントをもとに、特にどのような点に自己意識変化を感じているかの追跡調査である。結果は5つのカテゴリーに大別され、その中でも自分に対する問題意識が数字の上で最多となっている。

表2 特に意識変化を感じている点

カテゴリー	将来にむけた目的意識	自分に対する問題意識	他者の存在と視点	達成動機と積極性	（英語）学習意欲
回答数	5	8	5	4	6
「はい」の回答数に対する比率	22%	35%	22%	17%	26%

注：複数のカテゴリーにまたがるコメントがあるため、回答数の合計（＝28）は、「はい」の回答数（＝23）を上回っている。

表3は「(2)英語学習に対する意識変化」を調べたもので、項目(1)と同じく8割以上の回答者が、英語学習への気持ちの変化を認めている。その補足説明から4つの要因が抽出されたが、プレゼンテーションへの支持率（回答数10、比率43%）が、題材・教材・リサーチプロジェクトという全体内容支持率（回答数11、比率48%）に拮抗している点

表3 英語学習に対する意識変化（28名回答）

質問	「これまでと比べて、自分の英語学習活動について何らかの意識変化が生まれましたか」 「（生まれた場合）その要因となったものは何ですか」			
回答	「はい」＝23名（約82%） 「いいえ」「どちらともいえない」＝5名（約18%）			
「はい」に対する要因	ビデオ題材中心	ビデオ題材、プリント教材、およびリサーチプロジェクト	プレゼンテーション	授業活動すべて
回答数	3	11	10	4
「はい」の回答数に対する比率	13%	48%	43%	17%

注：複数のカテゴリーにまたがるコメントがあるため、回答数の合計（＝28）は、「はい」の回答数（＝23）を上回っている。

は興味深い。つまり、項目(1)の自己意識変化とあわせて英語による自己発信（自己説明）活動が、よりインパクトのある学習体験になったとここでは推測される。表4は、プレゼンテーションを含めた語学意識変化要因についての補足説明である。

表4 「はい」と答えた回答者からのコメント（一部紹介）

* プレゼンに重点を置いた授業ははじめてだったので、非常に印象深かった
* この授業では、今時分が最も苦手とするプレゼンや自己表現のしかたを学んだ
* 唐突に学生を前に出して英語でしゃべらせたのが印象深かった。そういう訓練が大事だと思う
* 度重なるプレゼンと宿題に戸惑ったが、次第に授業が楽しみになってきた
* はじめて英語で話すことになんとなく違和感があったけれど、授業を重ねるうちにいつのまにか英語が自分の気持ちを伝える単なる手段という意識が生まれ、英語への抵抗感が軽くなった
* 自分で考えた英文をそのまま読んで相手に伝えるという学習ははじめてだった
* 改めて自分の英語力の低さを体感した授業だった
* 英語で自分の考えを述べることがなかったので役立った
* 最後のプロジェクトプレゼンでは、今までの総仕上げとして自分の意見を人前で述べられてよかった
* 自分と違った視点から他の人がプレゼンするのが面白い。自分の英語力がどの程度か把握できた
* 高校生の時 speech contest に出場し人前で英語を話す機会はあったが、その場で自分の思ったことを英語で述べることなどはじめてだったのでいい経験になった

表5、6は「(3)英語学習方略」に関する質問と回答、および補足説明をまとめたもので、英語で英語を学ぶ（＝英語を使いながらさらに英語力に磨きをかける）という学習方略を実感できた、という選択肢が群を抜いている。

表5 英語学習方略（28名回答）

質問	「今回の授業を通してあなたの英語学習方法は以下のどれに相当するか、1つ選んでください」			
選択肢	1. 英語で何かをすることにより、さらなる英語を学んだ	2. 英語を学ぶことにより、さらなる英語を学んだ	1. 2. の両方である	どちらともいえない
回答数	21	4	3	0
比率	75%	14%	11%	0%

表6 各選択肢を選んだ理由

選択肢	主な理由（記述式回答より）
1	英語で原稿を作り、プレゼンするのは「使っている」感じがする 英語で文章を作り、ペア活動等で話す機会が多かった 使っていくうちに相手に伝わりやすい英語を学んだ 使ううちに英語が自分の身体により近いものになった 自分の気持ちを伝える手段として使うことが多かった 単語暗記より、相手に何かを伝えるという意識が先行した 英語で何かを伝えるという概念が根付いた 単語や文法より、表現力や対話力を学んだと感じている これまで進んで英語を使うことがなかった 自己発信型授業だった
2	英語は伝えるための言語であるため、そういう英語を学習できた speaking のスキルを学ぶ機会が多かった 今まで学んできた英語授業とは異なった部分が多々あった
3	英語で何かをすることにより、さらなる自己省察、自己表現について考えるようになった さらなる英語というより、英語で何かを伝えようとするのを学んだから

表7、8は「(4)授業スタイル」についての質問、回答、ならびに補足コメントで、学習者中心型 & 自発性重視の英語授業であった、と6割以上が報告している。

表9、10は、「(5)英語学習活動や方略、今の、これからの自分のあり方、世の中の流れなど、多方面を網羅した36の

表7 授業スタイル（26名回答：2名無回答）

質問	「今回の授業はあえて以下のいずれに該当するか、1つ選んでください」				
選択肢	1. 学習者中心で、学習者の自発性が重視された授業	2. 学習者中心ではあるが、全体として受身的な授業	3. 教員中心ながらも、学習者の自発性が重視された授業	4. 教員中心で、全体として受身的な授業	無回答
回答数	17	4	5	0	2
比率	61%	14%	18%	0%	7%

表8 各選択肢を選んだ理由

選択肢	主な理由（記述式回答より）
1	*ビデオ→自己反省→ペア（グループ）活動→プロジェクト活動において、先生はきっかけ（ヒント？）を与えるだけで、後は学習者が考えないといけない *この授業では学習者自身が「自己表現」をしなければ成り立たないと思った。自分で伝えたいことを考えてこない授業にならないといった、自発性が重視された授業だった *プレゼン活動は全て本人の自己責任なので、学習者が良いプレゼンをしたいなら努力するし、適当なものでいいなら努力しないだろうから、本人の自発性が重視されている *宿題をやっとなければ授業が成り立たない *教員が用意した教材や課題に則って進められた授業だったが、授業自体は学生の発表が中心となっており、十分自発性のある授業だったと思う *プリント等もが学習者が考え、授業も「自分が発表する」という形で、両方とも既成の教材、解答がなく、学習者が自ら考えるものだったから *ほとんど1対1やグループのプレゼンが多かったので、学習者中心の授業だった
2	*与えられた課題をこなしたという感じが強かった *毎回の課題に結構苦労してしまったので、多少受身的な部分があった *自分が積極的に英語を話せなかった *学生自身に色々考えさせようとしてくれているようには感じられるが、全体的に今一つそうなりきれていなかったと思う
3	*教員が指示を出し、それを学生が自分の力でこなすものであった *先生の指示に従いながらグループワークが進められた

質問項目」の内容と調査結果を示している。

表10は36のアンケート項目について、各質問内容をカテゴリー（種別）とフォーカス（核心部分）の2点に分け、平均値を基準にどのような傾向／偏りが見られるかを探索したものである。○印の位置関係が示すとおり、全体として「右肩下がり」傾向が窺える。人生、現実社会、精神的成熟に向けての思考活動や、その関連教材とタスクへの肯定的評価が一番高く（左上部分）、ついで自己に関する項目が全体的傾向の中間あたりに位置している。そこでの関連教材やタスクが中間値を上回る一方、英語力（いわゆる4技能を中心とする、様々なスキルに対する自己評価、自己満足度）については最低平均値を含め、中間値を下回る項目も出てきている。最後の右下部分に見られるのは、英語力向上を目指した学習方法、学習時間、そして自己発信（writing & speaking）に必要な論理構成力である。まとめると、自己（学習者自身）を中軸として、現実社会や人生哲学などへの思考（問題発見・解決に向けたクリティカルシンキング：冒頭でふれた「語力」も含まれよう）への自己満足と自信は、今回の学習体験を通して見出されたかもしれない。が、各学習者の英語力やそれに付随する学習方法と学習量については確たる認識と自信、新たな発見と満足感は見出しにくかったと言えよう。その背景には、レビュークイズや定期試験、グループによるピアレビューだけでは本当に自他共に認める語学力がついたか判断しかねるという、個々学習者の不安や疑念が通底していると思われる。

5. 今後の課題

アンケート結果や「何でも帳」からのフィードバック、そして授業現場からの反省をふまえると問題は山積している。が、喫緊の課題として、英語力の向上と自信を深めてもらえるよう、この授業にふさわしい評価テストをデザインする必要がある。つまり問題提起～解決に向け、自己批判や葛藤のみならず、これまでの社会通念や常識をも疑う

表9 事後アンケート (6件法による36の質問項目)

自分に当てはまる番号1つに○印をしてください。10分程度でできるようにになっています。 授業成績とは一切関係ありませんので安心してください。率直な回答をお願いします。			
全く思わない／そうではない	= 1	どちらかといえば思う／そうである	= 4
そう思わない／そうではない	= 2	そう思う／そうである	= 5
どちらかといえば思わない／そうではない	= 3	とてもそう思う／そうである	= 6
1. 英語学習への興味・関心を持っている。	1—2—3—4—5—6		
2. 今の自分の英語学習方法に満足している。	1—2—3—4—5—6		
3. 英語の学習時間を増やしている。	1—2—3—4—5—6		
4. 英語学習に継続的に取り組んでいる。	1—2—3—4—5—6		
5. 目的意識をもって英語学習に取り組んでいる。	1—2—3—4—5—6		
6. 自分の考えや質問など英語で述べるようにしている。	1—2—3—4—5—6		
7. 自分の考えや質問など英語で書くようにしている。	1—2—3—4—5—6		
8. (相手などが) 話す英語を注意して聞くようにしている。	1—2—3—4—5—6		
9. ニュースや番組などを英語で聞くようにしている。	1—2—3—4—5—6		
10. 英語で書かれた興味ある情報を読むようにしている。	1—2—3—4—5—6		
11. 論理立てて英語で説明することが何とかできる。	1—2—3—4—5—6		
12. 身振りや顔の表情を使って英語で話すことが何とかできる。	1—2—3—4—5—6		
13. 自分の考えなどを客観的に英語で述べることが何とかできる。	1—2—3—4—5—6		
14. (聞かれた場合) 英語で何とか補足説明することが出来る。	1—2—3—4—5—6		
15. 英語で何とか質問したり確認したりすることができる。	1—2—3—4—5—6		
16. 自己表現することは気持ちがよい。	1—2—3—4—5—6		
17. 自分 (の考えなど) について質問されるのは楽しい。	1—2—3—4—5—6		
18. 目的のない機械的丸暗記学習方法は嫌いである。	1—2—3—4—5—6		
19. 教員・講義中心の授業スタイルは嫌いである。	1—2—3—4—5—6		
20. 自己対話など、深く考える機会のない授業は嫌いである。	1—2—3—4—5—6		
21. 学習者中心型の授業が好きである。	1—2—3—4—5—6		
22. 他人の考えや意見を知る機会を授業中に持ちたい。	1—2—3—4—5—6		
23. 今の自分と将来目標について考えることがある。	1—2—3—4—5—6		
24. 社会情勢 (国内外) について考えることがある。	1—2—3—4—5—6		
25. 大人になることへの自己責任や自覚など考えることがある。	1—2—3—4—5—6		
26. 人生に関わることに真剣に考えることがある。	1—2—3—4—5—6		
27. 原因—結果、過去—現在—未来など大きな視点から物事を考えることがある。	1—2—3—4—5—6		
28. 創造性をかき立ててくれる教材が好きである。	1—2—3—4—5—6		
29. 想像力を引き出してくれる教材が好きである。	1—2—3—4—5—6		
30. 自分で調べて考えていくことを促す教材が好きである。	1—2—3—4—5—6		
31. 自己表現力を引き出してくれる教材が好きである。	1—2—3—4—5—6		
32. 自分の将来について考えさせてくれる教材が好きである。	1—2—3—4—5—6		
33. 自分を冷静に見つめなおさせてくれる教材が好きである。	1—2—3—4—5—6		
34. 世の中の動きについて興味を持たせてくれる教材が好きである。	1—2—3—4—5—6		
35. 道徳観や倫理観について考えさせてくれる教材が好きである。	1—2—3—4—5—6		
36. 生きるとはどういうことかなど、哲学的思考を促してくれる教材が好きである。	1—2—3—4—5—6		

表10 アンケート結果：平均値、カテゴリー、フォーカスとの関係一覧

アンケート項目			フォーカス													
番号	平均値	カテゴリー	人生 哲学	精神的 成熟	創造	現実 社会	他者 存在	学習者 中心	自己	調査 探求	暗記	視聴	読解	論理 構成	英語 学習	学習 方法
26	4.89	思考	○													
23	4.86	思考	○													
25	4.79	思考		○												
27	4.57	思考		○												
1	4.54	関心													○	
29	4.54	教材			○											
34	4.54	教材				○										
24	4.5	思考				○										
28	4.39	教材			○											
22	4.32	タスク					○									
32	4.32	教材	○													
33	4.32	教材		○												
35	4.21	教材		○												
36	4.14	教材	○													
31	4.11	教材							○							
30	3.96	教材								○						
18	3.86	タスク									○					
8	3.82	タスク					○									
21	3.82	授業形態						○								
16	3.75	タスク							○							
17	3.54	タスク							○							
19	3.39	授業形態						○								
15	3.25	英語力							○							
5	3.21	目的意識													○	
14	3.18	英語力							○							
12	3.11	英語力							○							
20	3.07	思考							○							
4	2.93	継続性													○	
13	2.93	英語力							○							
2	2.79	学習法														○
3	2.75	学習量													○	
7	2.64	英語力												○		
11	2.64	英語力												○		
9	2.61	英語力										○				
10	2.61	英語力											○			
6	2.57	英語力							○							

力を含めたうえでの「自己を物語る英語スピーキング活動」の包括的評価、そのためのアチーブメントテストの作成である（TOEIC 等の実務試験で推し測れるものではない）。判官最良ではないが、今回の受講者たちの英語力は output プリント（英文エッセイ）やペアワーク & グループプレゼンテーションを通して決して悪いものではなかった。もっと自信を持ってもらいたかった。その点、テストに際してどのような質問を用意し、評価基準を設けるか検討する必要がある。批判的思考力（ex. 「怒り」や「疑い」）をバネに、周囲や今の、これからの自分に対する問題提起、そしてその対応／解決策の提示と説明）およびそれに付随した語（学）力（自己体内から発した英語をツールにした論理的説明能力）、この2つのスキルを相対的に（またはそれに近似する形で）評価することで、実態に即した、学習者に解りやすいフィードバックが可能となり、強固（＝継続 & 系統的）な学習動機づけにつながると思われる。今回の授業内容と結果を反芻しながら、具体的なテスト＆評価づくりに邁進していきたい。これまでのテストでは測れない「何か」を求めて。

引用文献

- 安西祐一郎 2003 「語力教育とは何か」『三田評論』1063号、30-40頁。
絹川正吉 1995 『大学教育の本質』ユーリーグ。
佐伯胖 2003 『学びを問いつづけて』小学館。
鈴木佑治 2003 『英語教育のグランド・デザイン：慶應義塾大学 SFC の実践と展望』慶應義塾大学出版会。
鈴木佑治・吉田研作・霜崎實・田中茂範（共著）1997 『コミュニケーションとしての英語教育論：英語教育パラダイム革命を目指して』アルク。
Chomsky, N. 2000 Chomsky on miseducation. Rawman & Littlefield. (寺島隆吉・寺島美紀子訳 2006 『チョムスキーの「教育論」』明石書店。)
茂木健一郎 2006 「思考の補助線14 この内なる頼りない感情をこそ」『ちくま』424号、26-29頁。